

2005年私家版『大言海』

萩原 義雄

その1 **ながぐつ【長靴】**『大言海』引用

ながぐつ【長靴】[*] 深く脛マデ掩フベク作レル靴。雨路、又は、乗馬の時ナドニ用キル。(1497頁) →逆引きは「つぐがな」。

《補遺》 現代では、脛より上を掩う長靴も製品としてある。農事作業に深い湿地帯などで蓮根を収穫する作業などに用いられる。実際、使用されている「長靴」は、「ソフトタビ長」と名称され、サイズは14号・18号・20号・25号4サイズがある。[ゴム長靴](#)。ゴム製長靴。ゴム長。



雨路に用いる「長靴」は、雨の日でも都生活では、ほとんど見かけられない。だ



会
が、北海道の雪道では必需品でもある。また、農園作業などの特別な場所では用いられている。

乗馬用の「長靴」は、図写真のように、皮製であり、通常の雨靴よりは長いものとなっている。

「長靴」を引用した文学作品として、近年『長靴を履いた猫』(http://cyberm.hp.infoseek.co.jp/GurpsReplay/I_am_a_Cat/Cat_which_wore_boots.html) や『赤い長靴』(<http://blog.drecom.jp/mimei/archive/411>) といった作品が知られている。



その2 くつがた【杓形】



《補遺》杓形をした国、イタリアの人。この国と日本国との関係は長い歴史を持っています。イタリア人のローマ法皇立サレジオ会宣教師コンスターチ・レンゾウ（パルマの貴族出身）さんは、2001年日本の屋久島でお亡くなりになりました。彼が日本で研究し続けたイタリアと日本の文化交流資料は、イタリア語で彼の国から出版される予定でした。ですが、この資料もまだ世に出されずじまいにあります。この原稿資料の行方を含め、再びイタリアと日本の教養ある方々が動き始めています。元早稲田大学図書館司書をなされていた岸トモ子（現在屋久島在住）さんや、吉井智子（北海道大学経済学部卒業後、アメリカマサチューセッツ大学卒業、現在屋久島在住）さんをはじめとする方々がこの取り組みをなさってきました。私たちが歴史的に認識している江戸時代の新井白石の著書『西洋紀聞』は、イタリアの宣教師ジョバンニ・バッティスタ・シドッチ（Giovanni Battista Sidotti 1668年-1714年11月27日）からの聞き書きが元でした。シドッチは、シシリア島パレルモ出身の王族の出身で実に豊かな西洋の知識を我が国にもたらしていたのです。シドッチは、1708年まだ日本が禁教令と鎖国



令とを保持していた時代に単独で海外から入国した方です。彼の日本渡来が八代将軍徳川吉宗のオランダ国と長崎出島だけでしたが国交政策として伝えられる窓口にもなっていくことにつながっていきました。彼が日本人の当時の服装髪型で腰に大小の日本刀を帯びて屋久島の小湯泊（現在は、「恋泊」と表記）に単独で上陸しました。このとき、屋久島の島民藤兵衛さんが第一発見者として、宮之浦の奉行所に伝え、ここから大隅領主である島津藩を介して長崎奉行所にて再度取り調べを受け、やがて江戸送りとなり、将軍家宣の命により新井白石が彼のシドッチに直接尋問したのです。このときの白石は、シドッチという人物を通して多くの西欧のことがらを学ぶこととなったのです。こうした時代を小説に纏めたものとして、藤沢周平『市塵』上・下（講談社刊）や秦恒平『悲しみのマリア』があります。ですが、レンゾウさんは、この日本人の書いた小説をお読みになってシドッチについて何も知られていないことを常々嘆いていたということを岸さんからお聞きしました。



その3 くつ-かけ【沓掛】